

ピラトはユダヤ教指導者や群集の要求を受け入れ、イエスを十字架刑に処する命令を下しました。イエスは処刑場である「ゴルゴダ(髑髏=しゃれこうべ)」と呼ばれる丘に、二人の囚人とともに向かったのです。

④ イエスの十字架上の死と復活 (6)

イエスの「最期の言葉」

鞭打ちの刑が終わると、イエスはピラトの官邸から十字架の横木になる木材を背負わされ、ゴルゴダの丘へ連れていかれました。鞭で打たれ、茨の冠をかぶせられた後ですから、イエスは朦朧とした意識で足取りもおぼつかない状態だったはずです。そこで、『人々は(中略)シモンというキレネ人を捕まえて十字架を背負わせ、イエスの後ろから運ばせた』(『ルカ』23章26節)とあります。イエスには数十kgの木材を担ぐ力は残されてはいませんでした。

十字架刑とは

十字架刑は「ローマ法」がもっとも重大な犯罪者、例えばローマ帝国の属国で皇帝の支配に反旗を翻した者の処刑のために用意した極刑でした。その内容を、大貫隆先生と山浦玄嗣先生^{はるつぐ}の著書から要約してみると次のようになります。

十字架の縦の木材に横木が固定され、その上に受刑者は置かれ両手を釘で打ちつけられます。教会にあるイエス像や絵画では、たいてい「手のひら」に打ちつけられています。事実は少し違うようで、『釘は手根骨^{しゅこんこつ}(手のひらの手首の近くにある骨で、8個の小骨からなる)の真ん中の小さな間隔か、あるいは前腕の橈骨^{とうこつ}と尺骨^{しゃくこつ}(手関節と肘の間を形成する二本の骨)の間』に打ち込まれます。そうしないと体重を支えられないからです。

次に両足を縦木に釘付けにします。これにはいろいろな方法があり、『柱の両側を挟むようにして左右の足を二本の釘で打ちつけるもの。足を重ねて正面で一本の釘で打ちつけるもの。ローマ人の好んだのは、両足を揃えて重ね、それを横向きにして、両のかかとを一本の釘で貫くというやり方』があったと山浦先生は書いておられます。3番目の方法だとすれば、『体は完全に右か左に横向きにされるので、ひどくねじれた形になる』とも解説されています。よく目にする像では体は正面に向いていますが、『体は多分左側に横ねじれにねじれた形で釘付けにされていた』だろうと、先生は推測されています。

そして全体が立ち上げられます。『すぐには絶命させず、その苦痛をできるだけ長引かせ』るのがこの処刑法の狙いであり、『息の根を止める時には、被処刑者の足の脛(弁慶の泣き所)の骨を折る』と体重を支えられなくなり、『被受刑者の体重は一気に下に沈み絶命する』といわれます。イエスも基本的にはこのような手順で殺害されたと思われます。

イエス、十字架上に …

十字架にかけられたイエス。『マタイ』27章を読んでみましょう。その『頭の上には、「これはユダヤ人の王イエスである」と書いた罪状書き』(37節)が掲げられていました。絵画などでは、ラテン語の「ナザレのイエス、ユダヤ人の王(Iesus Nazarenus Rex Iudaeorum)」という語の頭文字

をとった〈INRI〉の形で略記されています。イエスの左右には、二人の政治犯(強盗と書かれた福音書もある)が十字架につけられました。それを見て人々は、『神殿を打ち倒し、三日で建てる者、神の子なら、自分を救ってみろ。そして十字架から降りて来い』(40節)と、ののしりました。また、祭司長・律法学者・長老たちも『他人は救ったのに、自分は救えない。イスラエルの王だ。今すぐ十字架から降りるがいい。そうすれば、信じてやろう。神に頼っているが、神の御心ならば、今すぐ救ってもらえ。』(42~43節)と侮辱の言葉を投げつけました。

『わが神、わが神、なぜわたしを …』

イエスの最期のようすを4つの福音書で読んでみましょう。まずは最古の福音書である『マルコ』から。

.....
46 三時にイエスは大声で叫ばれた。「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ。」これは「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。

.....
さてここで問題になるのが、イエスの「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という最期の言葉です。本当にイエスがこの言葉を発したとすれば、「神に見捨てられた」という絶望と、「どうしてなのですか?」という神への抗議のうちに、その生涯を閉じたということになります。

『マルコ』10章33~34節では、『人の子は祭司長たちや律法学者たちに引き渡される。彼らは死刑を宣告して人の子を侮辱し、唾をかけ、鞭打ったうえで殺す。そして、人の子は三日の後に復活する』と受難予告をしたイエスでした。「復活することを宣言したイエスが、何をいまさら絶望したり、神さまに抗議する必要があるの?」と思った方もいらっしゃると思います。

このイエスの最期の言葉は、4つの福音書では微妙に異なっていたり、別の言葉に変えられています。そのちがいを見てみましょう。『マタイ』では次のように書かれています。

.....
45 さて、昼の十二時に、全地は暗くなり、それが三時まで続いた。46 三時ごろ、イエスは大きな声で叫ばれた。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」これは「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。

.....
『マルコ』(紀元70年代成立)のアラム語の「エロイ」という言葉は、『マタイ』(紀元80~90年代成立)ではヘブライ語風の発音である「エリ」に変えられ、神への信頼を歌う旧約聖書の『詩編22』(次々ページ参照)の冒頭を語りながら絶命したかのように修正されています。

また『ルカ』(紀元80~90年代成立)では、

.....
46 イエスは大声で叫ばれた。「父よ、わたしの霊を御手^{みて}にゆだねます。」こう言って息を引きとられた。

.....
「… お見捨てになったのですか」という抗議の言葉は削除され、自分を神に委ねる「信頼」の言葉に変えられています。

そして『ヨハネ』(90~100年代成立)では、

.....
28 … イエスは、すべてのことが今や成し遂げられたのを知り、「渴く」と言われた。こうして聖書の言葉が実現した。(中略) 30 イエスは、このぶどう酒を受けると、「成し遂げられた」と言い、頭を垂れて息を引きとられた。
.....

ここでも「見捨てられた」という言葉はなく、「成し遂げられた」という神の御心(聖書の言葉)を実現した成就感と、「救い」の確信を読み取れます。

なぜ4人の福音書記者はそれぞれ、異なるイエスの言葉を残したのでしょうか。山我哲雄氏は『『マルコ』後の福音書記者にとっても[「なぜ見捨てられたのか…」という言葉は]当惑と頭痛の種だったよう』であったと書いておられます。「なんでこんなこと、書いちゃったんだい」「これじゃあ、イエスさまが往生際の悪い人間だと思われて、誤解されちゃうよ」…福音記者たちにはそんな思いがあったのでしょうか?あるいは別の伝承があったので取り入れたのかもしれません。

また、山我氏は『このような神学的な「訂正」が必要だったことから『マルコ』の記述の歴史性がかえって裏付けされると言える』とされます。いちばん最初に書かれた『マルコ福音書』だからこそ、なんの思惑もなしに「歴史の事実」としてのイエスの最期の言葉を記せたということです。次に、このイエスの最期の言葉に対して、どんな解釈があるのかを考えていきます。

三つの解釈パターン

『わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか』というイエスの言葉の解釈をどのように行えばいいのかは、これまで次の3パターンの方向性で理解されてきたと阿部仲麻呂先生は書いておられます。

- ① 死に対する絶望に襲われた人の叫び
- ② 自分が見捨てられたという事実を知った人の叫び
- ③ 「詩編 22」(苦しむイスラエルの民の祈りの言葉)を、身をもって経験した義人の出来事
このどれかで解釈されることが多いそうです。

ローマ・カトリック教会は③の立場をとります。前教皇(日本では「法王」と訳されますが、カトリックでは「教皇」と呼びするのが通例です。)ベネディクト 16世は著書で次のように書いています。

『このうえない苦悩の叫びは、同時に、神がこたえてくださることへの確信でもあります。救いの確信でもあります。この救いは、イエスご自身のだけのためではなく、『多くの人』のためのもです』。ベネディクト 16世前教皇は「神への祈り」として理解されています。(ベネディクト 16世『ナザレのイエス』)

阿部先生は『ローマ・カトリックの教会共同体の立場の人々が聖書を解釈する場合、個人主義的な都合(①死への恐怖、②自分が見捨てられることへの恐怖)が一切排除され、「信仰者としての共同体的理解」にもとづいて解釈することが通例となってい』ると書いておられます。イエスを「個人的に解釈する」のではなく、「教会共同体的に理解する」わけです。『信仰者にとって、聖書全体は「信仰のまなざしで物事を眺める姿勢」(信仰的認識)に支えられて読み解かれるものなのです』。

『詩編 22』とは

ここで『詩編 22』とは、どんな内容なのかをみていきましょう。32節までであるので、最初の2

～ 6 節だけ引用します。

-
- 2 わたしの神よ、わたしの神よ / なぜわたしをお見捨てになるのか / なぜわたしを遠く離れ、救おうとせず / 呻きも言葉も聞いてくださらないのか。
 - 3 わたしの神よ / 昼は、呼び求めても答えてくださらない。 / 夜も、黙ることをお許しにならない。
 - 4 だがあなたは、聖所にいまし / イスラエルの賛美を受ける方。
 - 5 わたしたちの先祖はあなたに依り頼み / 依り頼んで、救われて来た
 - 6 助けを求めてあなたに叫び、救い出され / あなたに依り頼んで、裏切られたことはない。
-

この詩は、ダビデ(紀元前 1000 年頃、イスラエルの第 2 代の王。その有能さが初代王サウルの嫉妬を招き、一時亡命。サウルの死後、エルサレムを都に統一王国を確立。敵対的な異民族を征服し、強大な国家を建設した)の作。第 2 節がイエスの最期の言葉と同じです。詩編 22 全体は、神への「哀願」と「信頼」を交互に繰り返す内容になっています。

山浦玄嗣^{はるつぐ}先生の『わが神、…』の解釈

東日本大震災で半壊したふるさと・大船渡の街を見た山浦先生の心に、真っ先に浮かんだのは『エリ、エリ、レマ、サバクタニ!』でした。『何という悲惨な(中略)救いようのない絶望のことばでしょう。(中略)神様にも見捨てられてこんな惨めな死をとげようとしている自分の運命を呪う、やりきれないことばと聞こえます』。しかし、山浦先生は『それこそが誤解なのです』と言い切ります。

『詩編 22』の冒頭は、ダビデ王が自分の悲劇を嘆き、「どうして私を見捨てたのですか」と神に文句を言っています。しかし、そのあと『「だけど、神さま、俺は知っているんだ。神さま、あなたは助けてくださいとお袖にすがるものを見捨てたためしはいまだだかつて一度もない!」と続いています。先生は『これは絶望の中にあつてなお勇猛果敢に神様への信頼をさけぶ雄叫び』であり、『断末魔の息の下、上の句は唱えたけれども、イエスには下の句までを唱える力はもう残っていませんでした』と書いておられます。

それは「神への信頼」と「救いの確信」の言葉だ

『辛抱しよう。神さまはけっしてわれわれをお見捨てにはならない。惨害の野に立ったときにわたしの頭に中に響きわたったのは、イエスが断末魔の中で叫んだというあの雄渾な信頼の歌の発句でありました』。

変わり果てた瓦礫の街。これからどうすればいいのか …、そんな絶望の中で山浦先生に聞こえてきたのは、十字架上で最期を迎えたイエスの言葉でした。それは、神への「信頼」と「救いの確信」の言葉だったのです。

【引用・参考にした書籍】

- ・山浦玄嗣 『イエスの言葉』 / 『走れ、イエス』
- ・阿部仲麻呂 『使徒信条を詠む』
- ・日本聖書協会 『聖書 新共同訳』
- ・『岩波 キリスト教辞典』
- ・大貫 隆 『イエスという経験』
- ・山我哲雄 『キリスト教入門』